

『古頭付』から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

高桑, いづみ

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

2024-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030843>

『古頭付』から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

高 桑 いづみ

はじめに

『習道書』¹に挿入された笛役者名生のエピソードは、観阿弥時代の囃子をうかがわせる稀少な一節である。よく知られた話ではあるが、このエピソードから論を始めたい。

ある時、神事申楽の当座にて、為手の棟梁と童と、論議を歌ふ時、その時の調子鸞鏡也。若声ははまだ童声にて、盤式がかりに上りて行く。為手の声は鸞鏡なり。それに数々の論議を謡ふほどに、両人の調子不同にして、無興になるべかりしを、かの名生、笛の調子をば、もとよりの鸞鏡に吹きながら、若声の方をば、調子を少し心して、盤渉がかりに色どり、為手の方をば本調子の鸞鏡に吹きて、たがひの音曲無異に聞えて、当座も面白かりき。…

下略

棟梁の観阿弥と童だった世阿弥が〈少将の能〉の「ロンギ」を謡った折、二人の調子が微妙にズレた。しかし名生が謡い手にあわせて調子を調整しながら笛を奏し、調子のズレを観客にも共演した役者にも気づかせなかったという話である。掛け合いで謡う間中、謡の音高に沿わせて吹き続けたわけだが、ズレていなければ奏することはなかった

のだろうか。観阿弥以外の誰も不審に思わなかったのだから、通常でも吹き続けたのだろう。現在では要所に一定の旋律型を吹くだけで、吹き続けることはない。いつ頃から現行の奏法になったのか、それを解明するのは容易ではないが、国立能楽堂が二〇一八(平成三〇)年十月に入手した一噌流の伝書の中に、現行とは異なる笛の頭付が残されていた。頭付とは、笛が能一曲の中で吹奏するアシライの旋律型や舞、登場楽などの名称を、吹き出すキツカケとなる詞章と共に列挙した伝書である。本論では、現在に至る前段階の付ケとしてこの頭付を報告、検討したい。

一、国立能楽堂所蔵一噌流伝書のあらまし

今回報告する資料は、二〇一九年に国立能楽堂で行われた企画展「囃子方と楽器」に「一噌家伝来笛伝書類」として展観された。カタログの解題には「笛方一噌流の一噌八郎右衛門家に伝わった柳行李一つ分の古文書一式が国立能楽堂に寄贈された」とある。旧蔵者は八郎右衛門家の後継者であったと聞くが、寄贈後ほどなく亡くなられ、伝来等是不明である。八郎右衛門家は、一噌又六郎家三世一噌八郎右衛門善政(宗光、一六二四～一七〇三)の甥、八郎右衛門善久(享保二二(一七二七)年没 享年七八歳)に始まる分家で、明治維新まで津藩藤堂家に召し抱えられていた。今回寄贈された資料は、家系図・過去帳・門人帳・起請文・手付類など約七十点からなるが、その大半は笛の手付で、唱歌付、頭付、指付等が含まれる。まとまった資料、というよりは明治以後、散逸をまぬがれた残欠である。

現在、この伝書類について法政大学能楽研究所拠点共同研究「一噌流の伝承研究―島田已久馬旧蔵資料と国立能楽堂蔵一噌八郎右衛門家資料の調査―」(研究代表森田都紀)の調査が続いている。八郎右衛門家には頭付が四点残っており、共同研究ではそれぞれ『イロハ順頭付』『目録付頭付』『藍色表紙折本笛頭付』『茶色表紙折本笛頭付』と仮称したが、共同で伝書を読み進めるうち、そのうちの『目録付頭付』(以下『古頭付』と称する)が古態を残している

と高桑が気づき、今回の報告となった。一部の唱歌付について、すでに森田都紀氏が「能管の技法の変遷―宗家の伝承と地方伝承―」と題して能楽学会第二一回大会で発表し、その要旨「笛方一噌流分家一噌八郎右衛門家の〔獅子〕を『能と狂言』21に掲載している。本稿もそれに続く拠点共同研究の報告で、いずれ全体の解題や一部資料の翻刻を作成する予定である。

『古頭付』は半紙四枚を重ねて半分に折りたたみ、冊子の体裁にしてその裏表に〈高砂〉〈田村〉など十三曲について記したもので、綴じた形跡はない。現在残る一番外側の料紙には外題や内題、奥書等はなく、その次の料紙に所収曲の目録があり、その裏側から〈高砂〉の記述が始まっている。目録には三十二曲〈たかさこ(高砂)〉〈田むら(田村)〉〈奈風(松風)〉〈せかひ(是界)〉〈あま(海人)〉〈もみちかり(紅葉狩)〉〈とをる(融)〉〈おひまつ(老松)〉〈きよつね(清経)〉〈ゆや(熊野)〉〈長郎(張良)〉〈ふし太こ(富士太鼓)〉〈もり久(盛久)〉〈源氏供養〉〈はころも(羽衣)〉〈たへま(当麻)〉〈やしま(八島)〉〈てひか(定家)〉〈かしわさき(柏崎)〉〈のゝみや(野宮)〉〈せつしやう石(殺生石)〉〈夕かほ(夕顔)〉〈つねまさ(経政)〉〈ゑくち(江口)〉〈西行桜〉〈遊行やなき(遊行柳)〉〈あこき(阿漕)〉〈春か龍神(春日龍神)〉〈ともなか(朝長)〉〈道成寺〉〈石橋〉の曲名があがっているが、実際に記載があるのは傍線を付した曲のみである。一番内側の料紙の右側に〈松風〉の舞の前まで、左側に〈熊野〉の「クセ」末以降が記されており、その間に〈松風〉の舞から〈熊野〉の「クセ」までを記した数枚が挟まれていたはずだが、現時点では散逸している。〈当麻〉のあと、〈八島〉から〈野宮〉までを記した料紙も存在したのだろう。また、〈経政〉もシテ登場の「上ゲ歌」までしか記述がないので、その後を記した紙が存在した可能性も考えられるが、一枚紙を重ねて折りたたみ、その表裏に記すという体裁を考えると、後の曲ほど料紙を外側に重ねて、その左側に記載することになる。当然、目録の前に白紙の右側が重なるわけだが、そのような奇妙な体裁にしてまで目録通りの曲をすべて記述したのか否か、確証はない。

二、従来の頭付研究

『古頭付』の冒頭に記載された〈高砂〉は、『双笛集』に「脇能之次第之事」として例示される内容にはほぼ重なる。ただし『双笛集』では〈高砂〉の最後に「右脇能之吹様如此秘事候 努々物語にも不可有之候 以此口伝余之能を似たるやうに吹たる事候」と記し、一曲中のアシライを網羅的に表記したのは〈高砂〉のみで、他の曲については一ツ書数条程度の記述しかない。〈高砂〉以外の曲についてもかなり詳細な記事のある『古頭付』が出現した意義は大きい。

頭付については、竹本幹夫氏が毛利藩に仕えた由良瀬兵衛家伝来の『番笛集』を翻刻され、解題の中で同家に伝わる『双笛集』や『全笛集』『花笛集』との比較を行った。³『番笛集』は一八〇曲についてかなり詳細な内容を記す頭付だが、竹本氏は伝書間の表記や記事の相違に着目されたのみで、現行頭付との比較は行っていない。山中玲子氏が紹介・翻刻された藤田大五郎氏旧蔵『天文二年中村七郎左衛門長親奥書笛伝書』⁴も『双笛集』の系統だが、解題で『双笛集』諸本の記事の出入りは示すものの、現行頭付との比較はない。『双笛集』の流儀は確定できないが、〈高砂〉については最古の頭付である。そこで本稿では、『双笛集』の〈高砂〉がどの程度現行一噌流の頭付と一致するのか検討しつつ、その奏法が『古頭付』所収の他の曲にも該当するか否かを考察し、『古頭付』の位置付けを行う。

『古頭付』には、具体的な唱歌の記述はない。しかし早稲田大学演劇博物館蔵『一噌流笛唱歌付』⁵は「たかさこの内、呂のかすり・中のたかね一ツ又吹返後そといへ手・そといへて・ふうく小手・中入之笛大ユリノ事也・はねの吹上」等の唱歌を載せている。この付は「噌庵（筆者注 二世中村一噌）様被成をうつし申候／万治三年／子ノ五月廿七日／中村新五郎 宝永弍乙酉年改ム／長寸太夫より七世／一噌又六郎正賢（花押）」等と奥書にあり、万治三

(一六六〇)年に中村新五郎が書写した唱歌付に宝永二(一七〇五)年、又六郎正賢が朱で加筆したものである。噌庵は寛永一五(一六三八)年に没しているので、桃山時代から江戸初期頃の内容であろう。中村新五郎は噌庵の次男八郎右衛門かと『早稲田大学演劇博物館所蔵 特別資料目録5 貴重書 能・狂言』(一九九七)の解題で竹本氏は推測されたが、八郎右衛門ではなく、噌庵の長男で、切支丹の嫌疑をかけられて正保二(一六四五)年に揚屋へ入れ置かれた人物であろう。三宅晶子氏は同大演劇博物館蔵の『笛伝書拔書』の解題で、「所領を没収され、家の断絶の危機に立たされた新五郎が、芸跡を残すために書き記したとも考えられよう」と推測された⁶が、この「一噌流笛唱歌付」も同じ意図で書き留められた可能性がある。今回国立能楽堂が入手した八郎右衛門家資料中の系図では、新五郎・七良左衛門・八郎右衛門善政を兄弟として並記している。⁷『古頭付』の成立年代は不明だが、「中のたかね一ツ又吹返後」というへ手」など『一噌流笛唱歌付』とほとんど同じ表現(表1の8)が見えるので、関係は深からう。本稿では『一噌流笛唱歌付』の唱歌を参照しつつ、『古頭付』の唱歌の実態解明を進める。

『古頭付』と比較するのは、昭和十五(一九四〇)年に森川莊吉が大連で発行した私家版の『一噌流笛頭付』である。同本は、一噌流九世一噌又六郎平政香筆の秘録を原本のままに森川が版行したもので、現在、一噌流はこれに基づいて吹奏している(以下、現行と略記)。政香が寛政三(一七九一)年に著した詳細な唱歌集も、現行唱歌付の原本である。〈高砂〉については、表1で『双笛集』、『八帖本花伝書』第七卷(以下『八帖本』と略記)、『広大本宮増伝書』中の「笛ノ本」(以下『広大本』と略記)と現行唱歌の比較をおこなった。『双笛集』は諸本により内容に異同があり、〈高砂〉の頭付部分について吹奏する旋律型が異なる場合もある。本稿では鴻山文庫蔵「天文十七年千野彦五郎親久奥書『双笛抄』」の記述に従い、旋律型に異同がある場合は()内に記し、本文中でその都度指摘した。表記が『双笛集』と一致する場合は太字で示した。

表2は、『古頭付』の内容を小段ごとに再編成したものである。表1、表2ともに「吹奏箇所」の詞章は『古頭付』の表記に従い、『古頭付』で詞章の途中からアシライの指示がある場合は、当該箇所を下線を施した。舞事、ハタラキ事や登場楽、一曲のトメなどは表にあげていない。なお、表2では現行と同じアシライを奏する場合、太字で示した。以下、曲名に付した洋数字は、特に断らない限り表2の左端の数字を示している。

三 新旧頭付の比較

笛は現在、小段ごとに定められた旋律型を吹奏しているが、この傾向は『古頭付』にも認められた。本章では主な小段ごとに新旧の比較をおこなう。

(一) 次第

シテやワキの登場後、また舞やハタラキの序として謡う平ノリの小段。七五調の二句からなり、初句をくり返すので都合三句になる。通常の音量で謡ったあと、地取と称して地謡が低音で静かにくり返す。地取は拍子不合で謡う。また、脇能では三遍返といって地取を拍子に合わせて謡ったあとに再度ワキ・ワキツレが通常の音量で謡う。

『古頭付』で脇能は〈高砂〉一巻だけだが、地取部分で「中ノ高音」を吹いていた(表1・2の1)。これは現行と同じである。鴻山文庫蔵の『双笛集』では「ちうのたかね(筆者注 中ノ高音)又吹返して一ツ」とあるのだが、由良家蔵歴代奥書本では「ゆうく」とゆり。又中の高音跡をいろいろも吹へし。但中の高音吹候ハ、道行に吹様あり」と記載され、かつては「中ノ高音」の前に「ユリ」を吹くこともあった。『八帖本』では具体的な旋律型を示さずに「名乗の笛」と記しているが、同書ではアイ語りで31「脇に調子を知らせんが為に間過ぎ時分に音取を吹く也」と記

しており、地取でのアシライも次の名ノリの調子を知らせるために吹いたのであろう。一方、『広大本』では「昔ヨリ書物ニハ爰ニテ吹てなし」と記述があり、吹き様が次第に変化する過程がうかがえる。

『古頭付』では、2〈田村〉6〈殺生石〉の「次第」に「ソトイロへ」、3〈松風〉5〈当麻〉に「呂ノコテ」を吹くとある。現在、一噌流や森田流は脇能以外の地取でアシライを吹かないが、藤田流は吹いている。藤田流は古態を残しているのだろう。4〈源氏供養〉は舞事の序として謡う「次第」だが、『古頭付』ではその地取でも「コテのいろへ」を吹いていた。これも現行とは異なる点である。なお『一噌流笛唱歌付』では「そといろへて」を「たたりうろうろ／＼」と記し、宝永時に「ヲウシキノ呂 ホロターリウロウ／＼」と訂正している。

(二) 一セイ

登場後、また舞の前などで広く用いられる拍子不合の小段で、七五調の詞章を高音主体で謡う。脇能の前シテ・ツレは、登場後、橋掛りで向かい合って次のように謡う。

- 1 まずシテ・ツレが上音でそれぞれ五・七・五・七・五字からなる五句を謡い、
- 2 次に二ノ句と称してツレのみがクリ音をまじえて七五と謡う。
- 3 最後にシテ・ツレで七・五と二句謡って中音(フリ中回シ)で謡い収める。

二ノ句を含むかたちが正格だが、ツレを伴わない登場や舞の前などは二ノ句以降のない省略形が多い。なお本論では、便宜上二ノ句の前を一ノ句と仮称する。現在、脇能では

* 一ノ句末に「呂ノ吹上」

* 二ノ句に「高音」

* 「二セイ」末に「中ノ高音、あと吹返して小手・呂」

を吹き、シテ・ツレが橋掛りから舞台に入る間、小手・呂を吹く。

表1に記したように、『双笛集』では一ノ句末に「下無調より吹呂」を吹く。これは、『八帖本』の「下無調より出で、色糸有」や『広大本』の「呂ノカスリ」とほぼ同内容の手であろう。『双笛集』『八帖本』では二ノ句での「高音」の記載がないが、小段末には「中ノ高音」を吹くので、「二セイ」の原形はできていたのだろう。『古頭付』の〈高砂〉でも現行と同じ箇所には、ほぼ同じような旋律型の記述がある(表1の6・8及び表2の7)。8〈松風〉もシテ・ツレは「真ノ一声」で登場し、二ノ句をツレが謡う。現行では脇能と同じく「呂ノ吹上・高音・中ノ高音・小手」を吹くが、『古頭付』もほぼ同内容である。ちなみに『一噌流笛唱歌付』が掲げる「呂のかすり」は「ほうるひやらりうろうろく」で、宝永時に「ホールヒャー。ローウ、」と訂正している。これは現行の「呂之吹上」とほぼ同じである。また「中のかね一ツ又吹返後そといろへ手」は「ひようるり、ひういやうひういく、ひやうひういやろうく」で、宝永時に「ヒョールリー、ヒウーイヤーヒウイヒウーイヤ、ヒウーイヤーローウ、」と訂正し、傍線部分に「小手之ユビ也」と注記がある。波線部分は、現行の「中ノ高音」とほぼ同じである。

現在では、二ノ句のある「二セイ」であってもシテが「真ノ一声」で登場しなければアシライを吹かない。しかし『古頭付』では、

* 10 〈盛久〉も一ノ句末に「タカネ一ツ」、「二セイ」末に「中ノたかね一ツノチイロヘテフク也」

* 11 〈源氏供養〉でも「二セイ」末に「中ノたかね一ツ」

* 14 〈当麻〉は「二セイ」末に「中ノ高音一ツのちいろへて」

を吹いていた。〈当麻〉の謡い分けは〈松風〉にほぼ同じだが、〈盛久〉では一ノ句途中から地謡が謡い、二ノ句はシ

テ、それ以降は地謡が謡う。〈源氏供養〉は後シテの登場歌で、二ノ句は地謡が担当する。謡い分けは脇能とは多少異なるが、それでも小段末にはアシライを吹いていた。

9 〈富士太鼓〉は登場場面ではなく〔楽〕の前だが、二ノ句に「タカネ一ツ」、小段末に「中ノたかね一ツ」とある。現行では、アシライは吹かない。二ノ句のある「一セイ」のアシライは、脇能の登場歌だけに残ったということであろう。

12 〈田村〉と13 〈羽衣〉は二ノ句のない「一セイ」だが、小段末にそれぞれ「中ノ高音ノチソトイロヘテ」「中たかね一ツ」とある。省略形であっても、かつては小段末の区切りにアシライを吹いたのである。

(三) 「上ゲ歌」

能の小段の中でもっとも多用されるのが「上ゲ歌」である。七五調の句を連ねた平ノリの小段で、初句と終句をくり返すのが基本の作詞法である。二節型が正格で、上音で謡い出して中音に謡い収め(第一節)、再び上音に上行して下音で謡い収める(第二節)。第一節末でフリ中回シという半終止の節を謡い、大小鼓が終止の手(打切)を打つことが多い。第一節のみで終結する切尾型、途中の区切りが不分明なまま下音で謡い収める一節型もあるが、笛は現在、

* 初句をくり返す間に大小鼓が打つ「打切」にあわせて「高音」

* 第一節末の「打切」後、第二節の冒頭から「中ノ高音」

* 小段末に「小手」

を吹く。道行も「上ゲ歌」形式をとるが、道行の場合は小段末に「小手」ではなく「六ノ下」を吹く。「小手」は「六ノ下」の省略形である。

まず〈高砂〉だが、『双笛集』では道行で「中高音」「高音」の順に吹き、『広大本』でも冒頭の打切で「中ノ高音」を吹く点が現行とは異なる(表1の2・4)。またシテ登場の「上ゲ歌」でも初句の打切には記載がなく、第二節以降に「中高音一ツ」、小段末に「高音一ツ吹て六下へ納也」とあって、「高音」の位置が現行とは異なる(表1の11・13)。『広大本』でも「中ノ高音」「高音」の順に吹くなど、現行とは小異が見られた。その影響を残すのか、『古頭付』でも「ところハたかさこの」に「中ノタカネ」と記して「中ノ」を削除している(表1の11)。初句の打切に「中ノ高音」を吹くのが古態であったが、『古頭付』では現状にあわせて訂正したのでろう。「中高音」「高音」の順にアシライを吹く20〈田村〉34〈盛久〉43〈当麻〉は、古態を残すと考えられる。

それ以外は、表2にまとめたようにおおそ現行の形に則っていた。ことに道行は定型ができあがっており、15〈高砂〉19〈田村〉25〈張良〉30〈富士太鼓〉35〈源氏供養〉39〈羽衣〉41〈当麻〉44〈殺生石〉47〈夕顔〉は現行とほぼ同じである。道行以外では、17〈高砂〉33〈盛久〉37・38〈源氏供養〉45〈殺生石〉48〈夕顔〉50〈経政〉がほぼ現行と一致する。なお、『古頭付』では初句の打切に吹く旋律型に「高音」のほか「ヲル高音」「高音のふきむすび」「高音のヒシギ」などヴァリエーションが認められるが、吹き分けの基準は不明である。

現行と異なる「上ゲ歌」の中に、

* 初句の打切に「下ノたかね」を吹く36〈源氏供養〉

* 上ゲ歌後半に「中ノ高音」ではなく「下ノタカネ」を吹く22〈松風〉32〈富士太鼓〉

* 「中ノ高音」と「小手」の間にさらに「下ノ高音」を吹く40〈羽衣〉42〈当麻〉

など、情緒を表出したいところに「中ノ高音」のヴァリエーションである「下ノ高音」を吹奏する例が見られた。現行でも〈井筒〉の初同や〈芭蕉〉の二ノ同、〈松風〉汐汲みの前の「上ゲ歌」などでは第二節の冒頭で「中ノ高音」

ではなく「下ノ高音」を吹奏する。『古頭付』の23〈松風〉では現行とは異なり「ヲルタカネ」を吹くが、思い入れの強い謡「ふけ行月」を「高音」で強調するか「下ノ高音」でしみじみとアシラウか、アシライの方向が現行とは異なっていたようだ。現行では『古頭付』ほど「下ノ高音」を多用しないので、この違いは興味深い。23以外に16〈高砂〉20・21〈田村〉24〈松風〉26〈張良〉34〈盛久〉43〈当麻〉46〈殺生石〉でも第二節冒頭に「タカネ」を吹く。個々の「上ゲ歌」の曲趣にあわせたヴァリエーションが現行よりも多様だったと言える。

興味深いのが〈高砂〉の初同で、『双笛集』では「しきいなミしつかにて」のあとに「吹くへからず」、『八帖本』でも「一切吹べからず」、『広大本』でも「クリ不可吹」、『古頭付』でも「爰にて不吹候」とわざわざ記している(表1の17)。この「上ゲ歌」は初句のあとに大小鼓が打切を打たずスラツと謡い進める。『双笛集』の時代から、初句あとのアシライが定型になっていたために、注意喚起をしなければうっかりアシライを吹いてしまふ、と案じたのであろう。

(四) 「下ゲ歌」

「上ゲ歌」の前には平ノリで低音域主体の「下ゲ歌」を謡う例が甚だ多く、ここでは現在、低音域の「小手」を吹くことが多い。『双笛集』では鴻山文庫蔵・由良家一噌本が「木かけの塵をかかうよ、く」に又初中返て吹、由良家歴代奥書本が「呂の小手跡をかへして吹なり」と記し(表1の10)、『八帖本』では「木陰の塵をかこふよ」というに、中ノ呂を返して吹く也」と記述がある。現行同様、低音域のアシライを吹いていたのだろう。『古頭付』の〈高砂〉にはこの箇所での記述はないが、〈田村〉〈松風〉〈富士太鼓〉〈盛久〉〈源氏供養〉〈羽衣〉〈当麻〉〈夕顔〉に「ソトイロへ」「コテノイロへ」「呂ノコテ」など低音域の旋律型の記述が見られる(表2の51～58)。

(五) 「クリ」「サシ」

「クリ」は、「サシ」・「クセ」に先行して謡われる拍子不合の小段で、上音で謡い出し、クリ音を多用したあと、下音のユリで謡い収める。現行では冒頭に「クリ」、途中で大小鼓が手を打つあたりで「ヲル高音」、小段末に「ユリ」を吹く。『双笛集』では「本のねとりをゆうく」と吹く。同此うち大鼓よりかしらを打いたし、くりの内にて中の高音にて吹にてまち南枝花より吹かけ高音にて吹候て次のゆりをうたひのゆりに合候やうに可吹也」と記述している(表1の20・21)。「クリ」で吹奏する旋律型は「本ノ音取」とほぼ一致し、それを分けて吹くかたちだが、『双笛集』の時代から同じように吹いていたのである。『古頭付』については表2の59～66にまとめたが、途中の「高音」、曲末の「ユリ」はほぼ現行と同じ旋律型と推測される。

変則的なのが〈田村〉である。60は「クリ」ではなく、横道萬里雄が命名した「名ノリグリ」に該当し、小段末でユリを謡わない。「クリ」ではないので現在ではアシライを吹かないが、『古頭付』では「サシ」「クセ」に先行する小段とみとめてユリを吹いていた。

「クリ」に続く「サシ」は拍子不合の小段で、上音で謡い出し、サラサラと謡い流して下音で謡い収める。脇能では「サシ」末に低音域の「真ノ六ノ下」、脇能以外では「呂ノ小手」を奏するが、『双笛集』では「六下」を吹いていた。現行と同じである。67〈高砂〉では「カンノ六ノ下」となっている(表1の22『広大本』も同じ)が、「カン」は高音域を示す用語、「六ノ下」は低音域の旋律型で表現が矛盾する。「カン」ではなく「シンノ六ノ下」の写し間違いの可能性も考えられよう。『古頭付』の他の曲では「呂ノ小手」以外に「六ノ下」を吹くなど曲趣によってヴァリエーションがあるが、低音域の旋律型を吹いた点は共通している。

(六) 「クセ」

一曲の中心となる平ノリの小段で、三節で構成される本グセを正格とする。全体を地謡が担当し、第一節は下音なしし中音で謡い出して下音で謡い収め、第二節は中音で謡い出して下音で謡い収め、第三節はシテなどの役謡が上音で謡い出し(これをアゲハという)、最高音のクリ音を経たのち下音で謡い収める。本グセにはアゲハ前が二節に分かれない例もある。また、アゲハが二回ある二段グセ、アゲハのない片グセもあるが、二段グセについては後述する。現在、本グセで笛は、

＊ 最初に謡が上音に上行するところで「中ノ高音」

＊ アゲハ後、謡がクリ音に上行するところで「上ノ高音」

＊ 「クセ」末に「小手」

を吹く。二段グセは、二度目のアゲハで「ヒシグ上ノ高音」を吹く。現在では謡の音高の変化に沿うような旋律型を選んて吹いているが、『双笛集』や『古頭付』は違っていた。

まず〈高砂〉であるが、『双笛集』では「ミな和歌ノすかたならずや」(表1の23)に「中高音一ツ吹てさうの六下へ吹へし」、「はんミンこれをしやうくわんす」(同24)に「同手なり」、「立よるかけの朝夕に」(同25)に「高音ひしき一ツ」、「中にも名は高砂」(同26)に「中高音さうの六下へ吹へし」と記述がある。『古頭付』でも23に「中ノタカネ一ツ」、24に「タ、リウロ」と指示がある。『一噌流笛唱歌付』によると「タ、リウロ」は「ソトイロへ」の唱歌である。「ミな和歌ノすかたならずや」は第一節の末句、「はんミンこれをしやうくわんす」は第二節の末句であるから、「上ゲ歌」や「下ゲ歌」同様、「クセ」でも節の区切りにアシライを吹いたことになる。興味深いのは25「立よるかけの

朝夕に」で「高音ひしき一ツ」を吹く点である。ここでは謡が中音に下行してフリ中回シを謡い、大小鼓が特別な手（頭組）を打つ。現在では区切りとは認識されていないが、『双笛集』の時代はそうではなかったのだろう。「クセ」では第一節末や第二節末にも、大小鼓が終止の手を打つ。大小鼓が手を打てばそこは区切りであり、鼓にあわせて笛もアシライを吹いたのであろう。『八帖本』『広大本』の第一節末でも「中ノ高音」、第二節末で「小手」、アゲハ後の「立よるかけの朝夕に」で「甲より吹く手」と記述がある。表1では記述を省略したが、『八帖本』では第二節末（24）に「笛吹きやう。鼓も打切りて、上端、謡はする事、本の打ちやうなり」と鼓の手についても言及している。笛は謡の音高の変化ではなく、小段内の区切りや鼓の手に連動して吹いていたのである。

これは〈高砂〉に限ったことではなく、表2の75〈田村〉80〈羽衣〉81〈当麻〉82〈殺生石〉83〈夕顔〉の「クセ」にも該当する。すなわち

* 第一節末に「中ノ高音」や「下ノ高音」「コテノいろへ」など中・低音域の旋律型

* 第二節末に「ソトイロへ」

* 小段末には「六ノ下」や「小手」など低音域の旋律型

を吹奏するのが古態であった。アゲハ後、フリ中回シに下行するところにアシライを記載しているのは74〈高砂〉75〈田村〉81〈当麻〉だけだが、〈当麻〉では二度目にフリ中回シに下行する「正身のミタ如来けに」でもアシライの指示がある。

八右衛門家の笛伝書には、「クセ」に関連した興味深い記事がある。『古頭付』同様、一枚紙五枚を重ね合わせただけの体裁で綴じた形跡はなく、途中の料紙が抜けた残簡で共同研究では『笛伝書残簡』と仮称したが、古い内容の記事を多く含む伝書である。『古頭付』とはほぼ同年代と推定したい。そこに

二段くせ舞の時ハ能乱舞共二前吹かず後ノ曲舞ヲ専ニ吹也。又イ曲舞ハたくさんニ吹ト云ともしやうきニこしなとかけ候而、あふきニて種々ノあひしらい候ハ、ふかす也。立曲舞ハ居曲舞も道前也。居曲舞ハたくさんなるへシ。立曲舞ハ仕舞在ニよつてふかぬかましニて候。

と書かれていた。整理すると、

- a 二段グセの場合、一段目は吹かず、二段目に専らアシライを吹く。
 - b 居グセにはアシライを多く吹く。
 - c 居グセでも床几にかけて所作がある場合はアシライは吹かない。
 - d 舞グセは所作があるのでアシライは吹かない方がよい。
- となる。

79 〈源氏供養〉はアゲハを二回謡う二段グセだが、『笛伝書残簡』の記事通り、最初のアゲハ「相へつりくのことハリまぬ」までアシライの指示がない。最初のアゲハ以降、節の区切り「朝かほの光たのまれす」や二度目のアゲハに指示があるのも『笛伝書残簡』の記事通りである。

74 〈高砂〉も81 〈当麻〉も居グセであるから第一節末、第二節末、フリ中回シのあと、などアシライを多く吹いたことになるが、同じ居グセでも、78 〈盛久〉は「クセ」末直前、夢の話の終わりを示す「の給ひて、夢ハ即さめにけり」、その直後の「クセ」末以外にアシライの指示がない。古い付では曲によって記述に精粗があるので、〈盛久〉は、常と異なる箇所のみ指示したのだろうか。一方75 〈田村〉は舞グセだが、居グセ同様吹く指示が多く、77 〈松風〉も型の多いアゲハ以降にアシライを多く記している。『宗節仕舞付』の〈松風〉では

「すむかいあらバこそ」といふ時分よりしやうぎをたち、そとたち出、「わすれがたミもよしない」といふ時、持

たるちやうけんをさつとすて候とき、… 以下略

アゲハ以降に現在と同じような型が確認できる。「ふかぬかましニて候」とあるので、『笛伝書残簡』ではアシライを禁じていたわけではない。頭付に指示があつても、その都度臨機応変に吹奏していたのだろうか。

cに該当するのが76〈田村〉である。『古頭付』では第二節末に「爰ニテ大夫ノしまい有間、不可吹」と記しており、『岡家本江戸初期能型付』では、床几にかけながら両足で拍子を踏む型が記載されている。『笛伝書残簡』の記事通りである。

『双笛集』には指示がなかったが、アゲハ後、謡がクリ音に上行するところで現行と同じく「ヲル高音」など高音域の旋律型を吹く例も多く（〈田村〉〈松風〉〈当麻〉〈羽衣〉〈殺生石〉〈夕顔〉）、〈松風〉では二度目にクリ音に上行する「おもかけに立まさり。をきふし」でもアシライを吹いていた。徐々に現行基準への移行が進んでいたのだろう。

(七) ロンギ

「ロンギ」については、『双笛集』を受け継ぎながら、『古頭付』ではさらに細かくアシライを吹いていた。初句打切あとのアシライ（表1の27）は現行に通じるが、シテと地謡の掛け合いから地謡のみになる地渡シでもアシライを吹いていた（同28）。これは後場の「ロンギ」も同様である（同38）。28・38は、現行ではアシライを吹かない。〈盛久〉87「御しんかんハかきりなし」では、最初の地謡の末で「ソトコテ」を吹いていた。これも現行ではアシライはない。〈松風〉では汐汲みの最後86「しをちかなや」で、「呂ノコテ一返。イカニモウツクシクフクヘシ」となっている。現行では「小手不吹モ」と書かれており、『古頭付』から現行へ向けてアシライを減少させる過程がうかがえる。

三 拍子不合の謡、コトバでのアシライ

『古頭付』では「クセ」の吹奏箇所には『双笛集』に通じる古態が見られたが、それ以外に『古頭付』を特徴づけるのが、「問答」や「掛け合」など拍子不合のサシ謡を含むコトバの部分で低音域のアシライを吹奏する点である。これは、『双笛集』にはほとんど見られない。『双笛集』や『八帖本』『広大本』では、前シテ登場後のサシ末(表1の9)に「呂をゆうく」と後のうたひまで色々吹納也」「呂」「真ノ呂一ツ吹 トメヲ色々ニ吹ク。但六下ノ小手ヲ吹テモ吉」、前場の詞の途中(同16)に「松もろともにこの年まで」と云に呂の色を吹なり」「松もろともに、この年まで」に呂の色を「小手ノイロエ フウフ小手」、後場(同34)に「呂ののたれ」「イロエノ吹ヤウ」とあるのみである。この三箇所のアシライは後述するようにすべて現在でも吹奏されているが(16は一噌流では吹かない)、表2の90以降にまとめたように『古頭付』では現行ではほぼ吹奏しない箇所でアシライの指示が見られ、しかもかなり体系化していた様子うかがえる。夢幻能の進行に沿いながら、場面ごとに検討しよう。

(一) シテ登場前のワキのコトバ

〈松風〉でワキがアイに名所について尋ねる直前のコトバ98「人にたつねはやとおもひ候」に「コテ」と指示がある。

(二) 前場のシテ登場場面

前シテが登場して「一セイ」「サシ」、「下ゲ歌」「上ゲ歌」と一連の謡を謡う、「下ゲ歌」直前の「サシ」末、〈高

砂」90「こゝろヲともトすかむしろの、おもひ」で「本の呂」、〈松風〉99「おもひおほさぬ心かな」で「呂ノコテ」、〈当麻〉の111「何にはる／＼とおもふ乱」で「かつらノ呂一返」の指示がある。現在、〈高砂〉では「真ノ呂」を吹くが、〈松風〉や〈当麻〉ではアシライを吹かない。いずれも同じ小段構成だが、協能だけにアシライを残したのだから。

(三) 前場のワキ・シテの「問答」や「掛ケ合」

前シテ登場の段が終わり、ワキとシテの「問答」「掛ケ合」になる。現在では原則としてここでアシライは吹奏しない。

しかし〈高砂〉では「問答」の途中のシテのコトバ末、91「しる事あらハ申さ給へ」で「コテノイロへ」を吹いていた。このアシライは『双笛集』にはない。現行謡では、この直後のワキのコトバからフシがつくので一つの区切りである。続く92「相生のふう／＼と成物を」はシテ・ツレが同吟するサシ謡末で、ここで謡は下音に下行し、次のワキの謡「謂はれを聞けば…」は改めて上音から謡い出す。このシテ・ツレ謡では現在大小鼓が「ツツケ」を寄せて打ち、段落の手「ヲキ」を打つ。横道萬里雄は「謂はれを聞けば…」以前を「問答」、以降を「掛ケ合」と小段を別にした。91以上に大きな区切り、と言えるだろう。現在、森田流はここで「夫婦ノ手」を吹く。「相生の夫婦」という詞章を際立たせるために吹く、と理解していたのだが、コトバの意味ではなく区切りを意識して吹いたようである。『一噌流笛唱歌付』でも「ふう／＼小手」として「ひやろるひやろるういや、ほひやろる／＼」と唱歌を記し、宝永時に「ヒヤーロールーヒヤーヒウーイヤ、ヒウーイヤ。ヲヒヤーローウ、」と訂正した上、「小手より吹出」と注記している。『広大本』ではその後の「しる事」に「小手」、「浦山をへたてて」（表1の14・15）にも「色へノ小手」と記

している。

〈高砂〉以外では、以下の曲にアシライが見られる。

100 〈松風〉では「掛ヶ合」途中のシテ謡末「秋なりけり。あら心すこの夜す」に「呂ノカスリ」を吹く。このあと改めてシテが上音で「いざいざ汐を汲」もうと謡う前の区切りである。112 〈当麻〉122 〈夕顔〉では「問答」途中のシテのサシ謡末に、前者は「呂ノかすり」後者は「コテノいろへ」を吹く。ともにシテ謡が下音に下行し、次のワキ謡は上音から謡い出す。112は「一心ふ乱に南無あみたふつ」と宗教性の強い詞章に応じてごく低音の「呂ノかすり」を吹いたのではないか。

呼掛で登場した前シテのサシ謡末に「コテノイロへ」を吹くのが108 〈源氏供養〉「是迄あらハれ出たるなり」、116 〈殺生石〉「もとめたまへる命かな」である。〈源氏供養〉では謡は呂音、〈殺生石〉では下音に下行し、ともに次のワキ謡はコトバで始まるので「掛ヶ合」途中での区切りである。

〈松風〉のワキが宿を借りる場面で、ツレが101「あるしに其由申候はん」とワキに告げる句、シテの返答102「（お宿は）叶ふましき由申候へ」、宿を貸すと決めて103「おとまりあれと申候へ」とツレがワキに告げる句にそれぞれアシライの指示があり、セリフが一段落つくところでいちいちアシライを吹いていた。101には「立マハル度ニ口伝有」と注記もあり、ツレが応対のたびに向きを変えるのにあわせてアシライを調整した様子も伺える。このような細かい指示はほかの曲には見られないが、宿を借りる「問答」は〈八島〉などにも見られる。〈松風〉以外でも、同じ設定の曲にはアシライを吹いた可能性が考えられよう。

(四) 平ノリ謡前のアシライ

平ノリ謡直前のサシ謡やコトバでアシライを吹く例がかなり多く見られた。平ノリの小段は前場・後場を通して見られるが、アシライの指示は主として前場なので、ここに挙げておく。

〈田村〉の初同直前96「ありしハ是坂ノ上の」、〈松風〉の「下ゲ歌」直前104「又いつの世のおとつれを」、〈羽衣〉の「下ゲ歌」直前の「下ノ詠」末110「行ゑしらすも」、〈当麻〉の初同直前113「ひさくらの」、〈夕顔〉のワキの登場のサシ末119「花むらさきの野お分て」、〈経政〉の初同前126「在かたさよ」に「ソトイロへ」、〈盛久〉道行の「下ゲ歌」前106「いつ帰るへき旅ならん」に「呂ノコテ」と指示がある。

(五) 後シテ登場のサシ

後シテ登場の段では、サシ謡末の93〈高砂〉「夜ノツ、ミの拍子をそろへ」に「呂ノのたれ」の指示がある。これは現行と同じで、〈高砂〉だけの特徴である。『八帖本』では「夜の鼓の拍子を揃へて」と云所にて、鼓、地頭に習ひあり。笛の吹きやうあり」と記述がある。現在、大小鼓は地頭を打たないが、かつては打楽器の手にあわせてアシライを吹いていたことがうかがえよう。〈当麻〉も、後場のサシ謡末114「ほつしんきやく来のほうミを」に「呂ノのたれ」の指示がある。〈高砂〉も〈当麻〉もサシ謡のあと高音域の謡になる。同じ小段構成なので同じ旋律型を吹いたのだろうが、現在、〈当麻〉ではアシライを吹かない。これも協能である〈高砂〉だけにアシライを残したのだろう。『広大本』では、〈高砂〉後場の「しやうこんによつてこしをすれハ」、「千年のみとり」（表1の35・36）でもアシライを吹いていた。

(六) 後場の「掛ヶ合」

97 〈田村〉「観音おうこの結縁なる」、123 〈夕顔〉「あと能とむらひ給へとよ」に「中ノたかね」と指示がある。謡は下音に下行し、次のワキ謡は上音から謡い出す。前場の「掛ヶ合」では低音域のアシライを吹いていた(表2の91・92・101・103・108・112・113・119など)が、場面も高揚した後場では中音域のアシライを吹いたのだろう。ただし、〈源氏供養〉のシテ謡末109「なのらすとしろしめされや」では「コテノいろへ」、124 〈夕顔〉「さも物すこき思ひたまハシ」はワキ謡末だが、「そといろへ」と低音域の指示がある。

(七) その他

〈夕顔〉前シテ登場の「下ノ詠」末121「かけやたゑなん」に「コテノいろへ」の指示がある。『古頭付』には同じ設定をもつ曲がないので、これが定型になっていたか否かは判断できない。

一噌流では現在、〈高砂〉前シテの中入りに「大ユリ」を吹くが、『双笛集』や『古頭付』にもこの指示はあった(表1の29・表2の84)。『古頭付』では〈張良〉にも27「六ノ下一返。かたひしきニテはやッ、ミ有。其内大ゆり吹也。ノチはねテ一ツ」とあり、「早鼓」を吹く中で「大ユリ」の指示があった。また、〈当麻〉の115「せっしゅふ捨」にも「大ユリ」とある。〈当麻〉は後場のノリ地途中、ノリをハズして謡う特殊な句で、そのあとシテ謡になる区切りだが、特別な意味があったのだろうか。『矢野一字聞書』では〈実盛〉後場の「上ヶ歌」末「ナトカハイタラサルヘキ」、『コ、ニテ大ユリ遊候』と、ある。〈当麻〉に通じる宗教性の高い場面である。『古頭付』では祈禱をする117〈殺生石〉の後場、「木石心なし」でも「ノット」にあわせて「大ユリ」を吹いている。『矢野一字聞書』には

一、かなハ。ノットノ内、笛大ユリヲ一返吹。ヒヤウラ／＼／＼／＼ラウラヒウイヤウ ヒヤラウルリ。後ハ出ハトメニトメ候。コヘイヲ以テ種々ヲ云内ニ、此ユリヲ吹。

と記事があり、現在でも〈鉄輪〉や〈殺生石〉などの「ノット」にあわせて笛は「ノット」を吹く。「ノット」の旋律は大ユリとほぼ同じである。ちなみに『一噌流笛唱歌付』では「中入之笛大ユリノ事也」として「ひやら／＼／＼／＼るら、ひういや、ひやりうひうらるいや、ほひやろう／＼」を記し、宝永時に「ヒヤールラウ／＼／＼ラウラールラウヒウイヤ。ヒヤールラウヒウラールイヤ、ヲヒヤールラウ、」と加筆している。『矢野一字聞書』¹⁰では「ノット」以外に「文」や「クドキ」の中でのアシライにも言及していた。

一、文之内ニテ吹手。呂律ノ呂、又ハ完ノ小手吹也。文之内ニハフカヌ物也。乍去、クトキテヨム文ハ、少音ツル、也。… 下略

一、クトキノ内ニ吹手ハ、呂千ノ小手、又ハ呂律ノ小手也。又ハ呂ナリ。時／＼ヲトツル、ナリ。クツカムリノ笛アリ。

『古頭付』には該当する小段はなかったが、散逸した曲が残っていればさらに多様なアシライを確認できたであろう。このように、『古頭付』では能の構造に沿いながら体系的にコトバや「掛ケ合」途中でのアシライを吹いていた。低音域の旋律型を選んだのは、多くの例で謡も低音域に下行するためであろう。

『矢野一字聞書』の〈三井寺〉では「『日本一ノ御着』ト狂言云時、又コテ呂遊候」と、後シテ登場前にアイがアシラウ場面でも笛が吹いたことが見える。〈盛久〉では107「其由を申候へ。畏て候」で「しか／＼アシライ無之候」と記しているが、ここはアシライを吹かない、と注記をしなければうっかり吹いてしまうほどアイとの応対場面でのアシライも多かったのだろう。

その後、さまざまな曲で吹いていたアシライは脇能のみに限定し、〈高砂〉の「ノタレ」（表2の93）や〈松風〉の狂乱場面での「呂ノコテ」（表2の105）など効果の高いものだけを残して現在に至っている。

終わりに

以上で、『古頭付』の検討を終える。〈熊野〉は断片のみだったので除外し、検討したのは十二曲である。小段ごとに結論を記したので、再び総括する必要もないだろうが、かつて曲趣に応じて豊かにアシライが奏でられ、吹奏には一定の統一した基準がみられた。料紙を重ねただけの整わぬ体裁であったが、統一性を備えた頭付ケだったと言える。散逸が惜しまれる。

小段の形式を意識して吹奏していた笛がなぜ「クセ」に限って音高の推移という新たな基準でアシラウようになってのか、その説明が今後の課題である。アゲハ後のクリ音に関しては『古頭付』に萌芽が見られたが、その基準が「クセ」全体に及ぶのはいつ頃なのか、さらなる検討を重ねたい。

【注】

- 1 引用は『世阿弥・禅竹』（日本思想大系24 岩波書店 一九七四）による。
- 2 共同で『古頭付』を読み進めたのは、森田都紀、山中玲子、中司由起子、深澤希望の四氏である。『古頭付』の翻刻は、共同研究によっている。
- 3 竹本幹夫「由良家藏能笛手付『番笛集』解題と翻刻」（一）（二）『実践女子大学文学部紀要第二十八・二十九集』一九八六・一九八七年
- 4 山中玲子「天文二年中村七郎左衛門長親奥書笛伝書―翻刻と解題―『能 研究と評論』13（月曜会 一九八五）内題はナシ。外題は「宝永二年／唱歌附之内」。共表紙で墨付三三丁。安田文庫蔵。
- 5 三宅晶子「早稲田大学演劇博物館蔵『笛伝書拔書』―解題と翻刻―」『能 研究と評論』13（月曜会 一九八五）能楽資料叢書6『近世諸藩 能役者由緒書集成（中）』（宮本圭造編 法政大学能楽研究所発行 二〇二二）に系図が翻刻されている。
- 8 引用は『古代中世芸術論』（日本思想大系23 岩波書店 一九七三）による。
- 9 『鴻山文庫藏能楽資料解題 中』（法政大学能楽研究所編 一九九八）では「笛彦兵衛から相伝されていた伝書を天文十七年（一五四八）に千野親久が転写して牛尾小五郎に与えたのが本巻で、それを慶長二年に牛尾玄笛（若名小五郎）から穴戸善兵衛に譲ったことを示す…中略…天文の書写と考えていい写本である」と記している。
- 10 「囃子のはたらき」『能の囃子と演出』（音楽之友社 二〇〇三）で、すでに言及した。

鴻山文庫蔵『双笛集』「脇能之次第之事」由良家歴代奥書本の異同は（ ）内に	八帖本花伝書第七巻	広大本宮増伝書笛ノ本	現行一噌頭付
ちうのたかね又吹返して一ツ（ゆう／＼とゆり。又中の高音跡をいろえても吹へし。但中の高音吹候ハゞ道行に吹やうあり）	名乗の笛	昔ヨリ書物ニハ爰ニテ吹てなし	中ノ高音
中高音	吹く手あり。高音の調子 吹く手あり。高音の調子	中ノ高音一返	高音
高音	笛あり。甲の調子	ナシ	中ノ高音
六下色々吹	笛いかにも強々と吹く手あり。六ノ下を悠々と祝言に吹くべし	六下一返せりふまで	六ノ下
ゆう／＼と吹合る	ナシ	ヒシギ有。位カロシ。一声五段ノ一声有。	日吉真ノ一声
下無調より吹呂なり	下無調より出で、色々有	呂ノカスリ吹カクヘシ	呂ノ吹上
ナシ	ナシ	高音一つ	高音
中高音一ツ又吹返す	中の高音、吹返す。	中ノ高音吹返ス	中ノ高音あと吹返 小手・呂
呂をゆう／＼と後のうたひまで色々吹納也	吹きやう有。呂なり。	真ノ呂一ツ吹 トメヲ色ヘニ吹ク。但六ノ下ノ小手ヲ吹テモ吉	真ノ呂
木陰のちりをかかうよう／＼又初中返て吹（呂の小手跡をかへして吹なり）	「木陰の塵をかこふよ」というに、初、中の呂を返して吹くなり	ナシ	小手
ナシ	甲の色系	中ノ高音一ツ	高音
中高音一ツ	甲より吹く手あり。	高音一ツ	中ノ高音
高音一ツ吹て六下へ納也わき詞いひ出すまで吹也	中より吹く手あり、六下の手あり	六ノ下一返	小手
ナシ	ナシ	小手有	ナシ
		「浦山をへたてて」爰ニモ色ヘノ小手有。	ナシ
「松もろともにこの年まで」と云に、呂の色を吹く也（小手あり、習なり）	「松もろともに、この年まで」に呂の色系	小手ノイロエアリ。フウフ小手ト是ヲ云ナリ。	ナシ
吹くへからず	一切吹べからず	爰くり不可吹。	ナシ
高ねひしき一ツ	高音よりひしぎかけて吹く	高音一ツ	中ノ高音

表1 〈高砂〉の『古頭付』比較

	詞 章	吹奏箇所	古 頭 付
1	日も行末そ久しき	[次第] 末	中の高ね。いかにも祝言ニふき納也
2	はる／＼のみやこちを、／＼	道行・初句あとの打切	高ね一ツ吹。又中のたかね一ツも吹なり。
3	いくかきぬらん跡すゑの	道行・第一節末の打切	中のたかね返て一ツ吹
4	高砂の浦に着にけり／＼	道行・末	六ノ下。いかにもゆふ／＼と吹へし
5	くわしく尋はやと存候	着セリフ末	ひしき。一セイ
6	尾上のかねもひゝくなり	[一セイ] 一ノ句	呂ノカスリーツフクナリ
7	なミハかすミのいそかくれ	[一セイ] ニノ句末	タカネ一ツ
8	おとこそしほのミちひなれ	[一セイ] 末	中ノタカネ一ツ。又吹き返すノチイロエテ
9	こゝろヲともトすかむしろの、おもひ	[サシ] 末	本ノ呂。又のちイロエテ
10		[下ゲ歌] 末	ナシ
11	ところハたかさこの／＼	[上歌] 初句あとの打切	中メタカネ一ツ
12	なるまていのちなからへて	[上歌] 第一節末の打切	たかね一ツ
13	それも久しき名所かな／＼	[上歌] 末	六ノ下一返
14	しる事あらハ申さ給へ	[問答] シテのセリフ末	コテノイロヘ
15			
16	相生のふう／＼と成物お	[掛け合] 直前	「フウ／＼」コテノフキヤウアリ
17	しかいなミしつかにて	[上歌] 初句あと	爰にて不吹候
18	忝こそ目出たかりけれ	[上歌] 第一節末	タカネ一ツ

高ね一ツ吹納なり	甲の高音	はね手一ツ	高音
本の音とりをゆう／＼と吹。同此うち大鼓よりかしらを打いたし、くりの内にて中の高音にて吹候てまち。	笛くりあげ、音取を吹く。中の高音まで吹く。	本ノネトリー返	真ノクリ
高ねにて吹候て、次のゆりをうたひのゆりに合候やう二可吹也	ゆる笛の手あり。	ユリヲ可吹シ	ユリ
六下を曲舞までゆう／＼と	六下悠々と	カンノ六下一返 曲舞ノ内まで吹カケテ	真ノ六ノ下
中高音一ツ吹てさうの六下へ吹へし。	ナシ	中ノ高音一ツ	ナシ
同手なり（おなしく手あり）	笛吹きやう	小手有	ナシ
高音ひしき一ツ。	甲より吹く手	ナシ	ナシ
中高音さうの六下へ吹へし。	中の甲、六下	高音一ツはね手一ツ	「相生の松ぞ」に小手
ナシ	ナシ	高音ノヒシキ一ツ	高音
ナシ	ナシ	高音一ツ	ナシ
高音のひしき一ツ又はねて一ツ、さうの六下へ吹へし。	高音のひしぎ、一つ吹きかけ。	はね手一ツ（住吉に先行て）	ナシ
ゆう／＼とゆりを可吹様。狂言いてさる間ハねとりを吹也。	吹様あり	高音ノヒシキ一ツ 太夫カクヤエヲ見テ大ユリ一返吹テ納ルナリ	送り大ユリ
狂言物語すぎ、時分を見つゝろひ候て、そつと音とりにて、さてあひのうたひをうたはせ候やうに可吹也。	大臣殿、狂言に言葉をかはし給ふ時、笛、吹きやうあり。（中略）脇に調子を知らせんが為に、間過ぎ時分に音取を吹く也。	狂言あいを云納時分二吹手有	ナシ
高音のひしき一ツ。	高音ひしぎ	高音ヒシキ一ツ	高音
はねて一ツ六下と吹、ひつと可吹。	はね手一つ … やがてひしぐ	出はヒシク太こ有	付テ日吉出端
呂ののたれ	吹きやうあり「すゞしめ給へ」と云所にて笛、呂ののたれ吹く	イロエノ吹ヤウ有	ノタレ
ナシ	ナシ	「たまもかるなる岸陰の」爰ニはね手一ツ	ナシ

47 『古頭付』 から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

19	すめるた <u>ミ</u> とて	[上歌] 末	タカねーツ。ハネテーツ
20	猶々松の目出度いわれ御物語 候へ	[クリ] 直前	本ノ音取・ラルタカネ
21	なんし花は <u>し</u> めてひらく	[クリ] 末	下ノ上ノゆり、うたイノゆりト合候 ヤウニ吹アハスヘシ
22	いきとしいける物ことに。 <u>し</u> <u>き</u> しまの	[サン] 末	カンノ六ノ下一返。クセマイノウチ マテフクヘシ。
23	ミな和歌ノすかたならすや	[クセ] 第一節末	中ノタカネーツ
24	はんミンこれをしやうく <u>わ</u> ん す	[クセ] 第二節末	タ、リウロ
25	立よる <u>か</u> けの朝夕に	[クセ] アゲハあと、謡 がフリ中回シ、大小鼓が 頭組を打つ	タカネノひしきーツ。又はねてー ツ。
26	たとへなりけり。ときハ木の 中にも名ハ <u>た</u> かさこの	[クセ] 末	中ノタカネーツフタヘシ。たかねー ツ。又はねてーツ
27	けに名をゑたる松かへの	[ロンギ] 初句あとの打 切	タカネノひしきーツ。
28	かしこきよとて。つ <u>ち</u> も木も	[ロンギ] 地渡シ	はねてーツ
29	あまの小 <u>舟</u> にうちのりて	[ロンギ] 末	たかねノひしきーツ。又ハネテーツ
30	沖ノ方に出に <u>け</u> りや／＼	[ロンギ] 末 中入前	大ゆり吹也、大夫かくやへ入間吹へ シ
31		アイ語り	ナシ
32	この浦舟にほゝあけて△	待謡・初句あとの打切	タカネノひしき、はねてーツ
33	はや住ノ江に着に <u>け</u> り△	待謡末・〔出端〕 直前	ひしきにてテハフクナリ
34	夜ノツ、ミの <u>拍</u> 子をそろへ	後場 [サン]	呂ノのタレ
35	しやうこんによつて <u>こ</u> しを <u>す</u> <u>れ</u> ハ	後場 [一セイ崩シ]	タカネノハネテーツ

ナシ	ナシ	「頭ニさせば」爰には ね手一ツ	ナシ
舞吹出す。以下略	舞は神舞の懸り。急の急 なり。以下略	爰ニテ舞有。	神舞
ナシ	ナシ	はね手一ツ	ナシ
高ねのひしぎ、又はね手一 ツ。(高ね、はね手)	高音のひしぎ、はね手一 ツ。	はね手一ツ 又吹返シ テ一ツ	ナシ
笛の吹上也。さてのひ／＼ と、ひつと吹也。	のび／＼と吹き、はね手 吹き納めにひしぎ有。		真ノトメ

49 『古頭付』 から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

36	千年の <u>みとり</u>	後場 [一セイ崩シ]	たかねーツ
37	二月ノゆき。ころもにおツ	舞	マイ
38	さてはんせいハおミ衣	[ロンギ] 地渡シ	タカネノひしきーツ
39	千秋楽ハ民をなて	[ロンギ] 末	タカネノひしき。又ハネで。はねてーツ。又吹返す
40	さツ／＼のこゑそたのしむ ／＼	[ロンギ] 末	笛吹上也。ツ、ミの打上ノ拍子をうけてのひ／＼トひツと／フクヘキ也

表2

曲	吹奏箇所の詞章	吹奏する旋律型	現行一噌流頭付
---	---------	---------	---------

〔次第〕の地取 地取に「ソトイロへ」「呂ノコテ」をアシラウのが古い定型

1	高砂	日も行末そ久しき	脇能でワキ登場の 〔次第〕	中の高ね。いかにも 祝言ニふき納也	中ノ高音
2	田村	九重の春に急かん	脇能以外の登場の 〔次第〕	ソトイロヘアリ	ナシ
3	松風	月の夜しおをくまふ	脇能以外の登場の 〔次第〕 下掛りのみ	呂ノコテ	
4	源氏供養	うつゝに返すよしも かな	後の〔次第〕クリ・ サシ・〔クセ〕の前	地返してコテのいろ へ	
5	当麻	五色にいかてそミぬ らん	脇能以外の登場の 〔次第〕	呂ノコテ	
6	殺生石	うき世のたひに出よ	脇能以外の登場の 〔次第〕	そといろへ有	

〔一セイ〕 脇能以外でも二ノ句に「タカネ」、〔一セイ〕末に「中ノタカネ」をアシラっていた

7	高砂 (二ノ句 あり)	尾上のかねもひゝく なり	前シテ・ツレ登場 一ノ句	呂ノカスリーツフク ナリ	呂ノ吹上
		なミハかすミのいそ かくれ	二ノ句	タカネーツ	高音
		おとこそしほのミち ひなれ	〔一セイ〕 末	中ノタカネーツ。又 吹き返すノチイロエ テ	中ノ高音あと吹 返 小手・呂
8	松風 (二ノ句 あり)	うき世にめくるはか なさよ	前シテ・ツレ登場 一ノ句末	呂ノカスリ	呂ノ吹上
		なミこゝもとや須マ の浦	二ノ句末	タカネーツ	高音
		月さへぬらす袂かな	〔一セイ〕 末	中ノたかねーツ。又 イロヘテ	中ノ高音・小手
9	富士太鼓 (二ノ句 あり)	秋の風よりすさまし や	〔上ケ歌〕 前 一ノ 句末	イロヘ在	ナシ
		うてや／＼とせめ ツ、ミ	二ノ句	タカネーツ	
		あらさてこりのなく ねやな	〔一セイ〕 末	中ノたかねーツ	
10	盛久 (二ノ句 あり)	春なきなこりかな	前シテ登場 一ノ句 末	タカネーツ	ナシ
		たきつこゝろお人し らし	〔一セイ〕 末	中ノたかねーツノチ イロヘテフク也	

51 『古頭付』から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

11	源氏供養 (二ノ句 あり)	ミへん姿ハはつかし や	後シテ登場 [一セ イ] 末	中ノたかね一ツ	ナシ
12	田村	じしゆこんけんの花 さかり	前シテ登場 [一セ イ] 末	中ノタカネノチソト イロへて	ナシ
13	羽衣	浦人さハく波路かな	ワキの登場 [一セ イ] 末	中たかね一ツ	ナシ
14	当麻 (二ノ句 あり)	すゝしき道ハたのも しや	前シテ・ツレ登場 [一セイ] 末	中ノ高音一ツのちい ろへて	ナシ

[上ゲ歌] の定型 (クリ歌・トリ歌等を含む) 現行と同じ高音・中ノ高音・小手 (六ノ下) が
ゆるい定型

15	高砂	はる／＼のみやこち を、／＼	道行・初句あとの打 切	高ね一ツ吹。又中の たかね一ツも吹な り。	高音
		いくかきぬらん跡す ゑの	道行・第一節末の打 切	中のたかね返て一ツ 吹	中ノ高音
		高砂の浦に着にけり ／＼	道行・末	六ノ下。いかにもゆ ふ／＼と吹へし	六ノ下
16	高砂	ところハたかさこの ／＼	初句あとの打切	中ノタカネ一ツ	高音
		なるまていのちなか らへて	第一節末の打切	たかね一ツ	中ノ高音
		それも久しき名所か な／＼	[上ゲ歌] 末	六ノ下一返	小手
17	高砂	この浦舟にほゝあけ て△△	待謡 初句あとの打 切	タカネノむしきはね て一ツ	高音
		はや住ノ江に着にけ り△△	待謡末	ひしきにてテハフク ナリ	付テヒシギ
18	高砂	しかいなミしつかに て	初句あと	爰にて不吹候	ナシ
		忝こそ目出たかりけ れ	第一節末	タカネ一ツ	中ノ高音
		すめるたミとて	[上ゲ歌] 末	タカね一ツ。ハネテ 一ツ	高音
19	田村	春のそら△△	道行・初句あとの打 切	ヲルタカネ一ツ	高音
		かすむそなたや音羽 山	道行・第一節末の打 切	中ノタカネ一ツ	中ノ高音
		清水寺に着にけり／ ＼	道行・末	六ノ下一返フク也	六ノ下

20	田村	霞もうツもれて△	初句あとの打切	中ノタカネーツ	高音
		けに九重の春の空	第一節末の打切	ヲルタカネきりテーツ	中ノ高音
		時そとミゆるけしきかな△	[上げ歌] 末	六ノ下一返	小手
21	田村	なに流たる清水の△	初句あとの打切	タカネーツ	高音
		国土万民おもらさしの	第一節末（打切はナシ）	下無よりタカネへ吹上コテヘヲトシテ一返	中ノ高音
		我らかための観世音	[上げ歌] 末	タカネーツ。又コテヘヲトして一返	小手
22	松風	かけはつかしき我すかた△	初句あとの打切	ヲルタカネキリテ	高音
		あまのすて草いたつらに。くちまさり行袂かな△	[上げ歌] 末	下ノタカネーツ。コテヘヲトシテ一返	六ノ下（その前に中ノ高音）
23	松風	帰るかたをなミ△	初句あとの打切	タカネ吹ムスひーツゆふ△ト吹ヘシ	ヒシク高音
		ふけ行月こそさやかなれ	[上げ歌] 途中	ヲルタカネキリテーツ	下ノ高音 そのあとに小手
24	松風	露も思日ひも乱つ△	初句あとの打切	ヲルタカネキリテ	高音
		かミのたすけも波の上	[上げ歌] 末	タカネーツ。コテーツ	ナシ
25	張良	こかうの天も明行ハ△	道行・初句あとの打切	タカネノひシキーツ	高音
		しらみ渡れる川波や。かひのと	道行・末	六ノ下一返。イカニモツヨク吹也	六ノ下 その前に中ノ高音
26	張良	待かひもなしや。はや帰れ△	初句あとの打切	タカネーツ	高音
		夜ふかくきたられハ我も又。爰に	[上げ歌]・途中	タカネノひシキーツ。又コテーツ爰ニテイロセス吹也	ナシ
27	張良	思ふ心をミんためと△	初句あとの打切	中ノタカネーツ	高音
		いさみをなして帰りけり△	[上げ歌]・末 ワキ中入	六ノ下一返。かたひしきニテはやツ、ミ有。其内大ゆり吹也。ノチはねテーツ。	小手 ワキ中入り早鼓ノ内狂言シャベリ済、

53 『古頭付』から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

28	張良	月もくまなきしんか うに／＼	[上げ歌]・初句後の 打切	タカネノひシキーツ	高音
		おもふねかひもミツ しほの	[上げ歌]・第一節の 末	中ノタカネーツ	ナシ
		こまを早むるけしき あり	[上げ歌] 末・大ベ シ前	いかにも静なる早 笛。ノチ吹そらす。 又出羽ニも在。大夫 ことうヘシ	大ベシ
29	張良	くツをはせうより ／＼	中ノリ地・初句後の 打切	タカネノハネテーツ	ヒシク高音
30	富士太鼓	ねられぬまゝにおも ひたツ△	道行・初句あとの打 切	ヲルタカネーツ	高音
		松のひまより流れハ △△	道行・第一節末の打 切	中ノタカネーツ	中ノ高音
		男山。ミヤこにはや く付にけり／＼	道行・末	さうの六ノ下一返	六ノ下
31	富士太鼓	すゝむなミタハせき あへす	クリ歌末	ソトコテ	小手 その前に 中ノ高音
32	富士太鼓	かねてよりかく在へ きと思日ひなは△	初句あとの打切	たかねノ吹むすひー ツ	高音
		なミたにてもとむへ き物を今更に	第一節末の打切	下ノタカネーツ。コ テヘヲトシテーツ	中ノ高音・小手
		神ならぬ身を／うら ミかこちなけくそ衰 成△	[上げ歌] 末 物着 前	ものき ^ニ 在。しんニフ クヘシ	真ノ物着
33	盛久	行も帰るも別てハ △	初句あとの打切	ヲルタカネーツ	高音
		せきもりも。今のわ れをハよもとめし	途中の打切	中ノタカネーツ	中ノ高音
		みのをいり。あつた	途中の区切り、ただ し打切はナシ	コテノイロヘ	小手 不打切は 不吹
34	盛久	あら在かたの御経や	物着前のトリ歌途中 の打切	中ノタカネーツ	中ノ高音
		御使度ゝにかさなれ ハ、めしにしたかひ 盛久ハ	物着前のトリ歌末	タカネノひシキー ツ。ハネテーツ	六ノ下
35	源氏供養	花の宮こを立出て △	道行・初句あとの打 切	タカネノ吹むすスー ツ	高音
		白川おもて過行ハ	道行・第一節末の打 切	中ノタカネーツ	中ノ高音
		にほのうミ。けにお もしろきけしきかな ／＼	道行・末	さウノ六ノ下返	六ノ下

36	源氏供養	いろに出るかむらさきの／＼	初句あとの打切	下ノたかねニテイロシテ	高音
		夕日かけさして <u>それとも</u>	[上げ歌] 後半	中ノタかねツキテ又コテヘヲトシテ	小手
37	源氏供養	とハおもへともあたし世の／＼	待謡・初句あとの打切	ヲルタカねーツ	高音
		色在花も一時の	待謡・途中打切前	中ノタカねツキテーツ	中ノ高音
38	源氏供養	石山寺のかねノこゑ	[上げ歌] 途中の打切	中ノたかねつきてーツ	中ノ高音
39	羽衣	うき波たつと見て／＼	初句あとの打切	高音のひシキーツ	高音
		吹ものときき朝風の	第一節末の打切	中ノたかねーツ	中ノ高音
		つり人おゝき小舟かな／＼	[上げ歌] 末	六ノ下一返	六ノ下
40	羽衣	ひんかのなれ／＼し／＼	初句あとの打切	高音ーツ	高音
		天路を聞ハなつかしや	第一節末の打切	中高音 つきテーツ	中ノ高音
		空に吹まてなつかしや／＼	[上げ歌] 末	下ノ高音ーツこてヘヲトシテー返	小手
41	当麻	かへりきの路のせきこゑて／＼	道行・初句あとの打切	ヲル高音ーツ	高音
		夜昼わかぬこゝちして	道行・第一節末の打切	中ノ高音	中ノ高音
		たへまの寺に付にけり／＼	道行・末	さうの六ノ下一返	六ノ下
42	当麻	是そーこゑの／＼	初句あとの打切	ヲル高音きりて	高音
		よきやうの法ハよもあらし	第一節末（打切はナシ）	中ノ高音つきて	中ノ高音
		明れハ出て暮まで	[上げ歌] 末	下ノ高音ーツ こてヘヲトシテー返	小手
43	当麻	かけしはちすの糸桜	初句あとの打切	中ノ高音ーツ	高音
		くれなひもたゝこゑのさそはんや西吹秋ノ風ならん／＼	[上げ歌] 後半	高音ノ吹むすひーツ 高音ーツコテヘヲトシテー返	中ノ高音・小手
44	殺生石	身ハいつくともさためなき／＼	道行・初句あとの打切	たかねノひしきーツ	高音
		心のおくをしら川の	道行・第一節末の打切	中ノたかねーツ	中ノ高音
		なすのゝ原に付にけり／＼	道行・末	六ノ下一返	六ノ下

55 『古頭付』から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

45	殺生石	なすのゝ原に立石の ／＼	初句あとの打切	たかねーツ	高音
		又立帰る草の原	第一節末の打切	中ノたかねつきてー ツ	中ノ高音
		ものすこき秋のタかな	[上ゲ歌] 末	呂ノコテ	小手
46	殺生石	立帰り夜になりて	初句あとの打切	たかねーツ	ナシ
		此夜ハあかしともし 火の	[上ゲ歌] 途中 節 の区切り	たかねノひしき	
		石にかくれ失にけり や／＼	[上ゲ歌] 末	コテノあしらい有	小手
47	夕顔	ふしおかミ／＼	道行・初句あとの打 切	ヲルたかねーツ	高音
		月やあらぬとかこち ける	道行・第一節末の打 切	中ノたかねーツ	中ノ高音
		尋とひてそくらしけ る	道行・末	六ノ下一返	六ノ下
48	夕顔	かよふ心のうき空を ／＼	第一節末の打切	ヲルたかね。きりて ーツ	高音
		むなしきそらにあを くなり／＼	[上ゲ歌] 末	コテノ吹上一返	小手
49	夕顔	いさゝらハ夜もすか ら／＼	待謡・初句あとの打 切	たかねノ吹むすひー ツ	ナシ
		とふら ^(ママ) 法ぞ誠なる／ ＼	待謡末	ひしき僅ノ音取二ゆ り吹也	
50	経政	彼せいさんといふひ わを／＼	初句あとの打切	をる高音ーツ	高音
		こゑもふつしをなし そへて	第一節末の打切	中ノ高音ーツ	中ノ高音
		きせんの道もあまね しや／＼	[上ゲ歌] 末	下ノ高音一返吹かけ て	小手

[上ゲ歌] 前の [下ゲ歌]

51	田村	神の御庭の雪なれや	[下ゲ歌] 末	ソトイロヘ	小手
52	松風	いさやくまふよ／＼	[下ゲ歌] 末	ソトコテ	小手
		かけヲくむこそ心あ れ／＼	[上ゲ歌] あとの [下ゲ歌] 末	コテノイロヘ一返	小手
		我あととひてたひた まへ	[下ゲ歌] 末	コテノイロヘ	小手

53	富士太鼓	あかしかねたる夜も すから	[下ゲ歌] 末	コテノイロヘ	小手
		かたミそよしなき	[下ゲ歌] 末	ソトイロヘ	小手
54	盛久	かわらよツのつし	[下ゲ歌] 末	コテイロヘ	小手
55	源氏供養	立こそ水のけふりな れ / \	[下ゲ歌] 末	呂ノコテ	小手
56	羽衣	立つれいさやかよハ ん / \	[下ゲ歌] 末	呂ノコテ	小手
57	当麻	迷ふ我かためなれや	[下ゲ歌] 末	コテノいろヘ	小手
58	夕顔	さハリとなれは今も 猶	[下ゲ歌] 末	呂ノコテ	小手

クリ

59	高砂	猶々松の目度いわ れ御物語候へ	[クリ] 直前	本ノ音取・ヲルタカ ネ	真ノクリ
		なんし花はしめてひ らく	[クリ] 末	下ノ上ノゆり。うた イノゆりト合候ヤウ ニ吹アハスヘシ	ユリ
60	田村	則当寺の仏力なり	名ノリグリ末	ゆり	ナシ
61	盛久	大悲の光。いつくふ たうの所ならん	クリ途中	てよりフき上ル。ゆ りナリ	ヲル高音・ユリ
62	源氏供養	槿花一日唯おなし	クリ末	下より吹上候ゆり	高音ヲル・ユリ
63	羽衣	空ハかきりもなけれ ハとて	クリ中	高音一ッ	ヲル高音
		なつけたり	クリ末	ゆり	ユリ
64	当麻	抑此たへまのまんた らと申ハ	クリ	カンのカンーツいか にもうつくしく	草ノクリ
		右大臣とよ成と申 しゝ人	クリ途中	たかね一ッ ゆり	ヲル高音・ユリ
65	殺生石	御物語候へ	クリ直前	かんノカンーツ	草ノクリ
		うへ人たりし身なり しに	クリ末	ゆり	高音ヲル・ユリ
66	夕顔	たれかハかりニも語 伝む	クリ末	下無てうる吹上ゆり きりて吹也	ヲル高音・ユリ

クリと [クセ] の間のサシ

67	高砂	いきとしいける物こ とに。しきしまの	[サシ] 末	カンノ六ノ下一返。 クセマイノウチマテ フクヘシ。	真ノ六ノ下
----	----	-----------------------	--------	---------------------------------	-------

57 『古頭付』から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

68	田村	いそきそうとにうつ 立たり	[サシ] 末	六ノ下一返	呂ノ小手
69	源氏供養	幽霊成土正覚		呂ノコテ	
70	羽衣	世につたへたる曲と かや		僧ノ六下一返	
71	当麻	三味のちやうに入給 ふ		僧ノ六ノ下一返うつ くしく	
72	殺生石	たまもの前とそめさ れける		さしの六ノ下一返	
73	夕顔	たよりにたてし御車 なり		呂ノコテ一返	

[クセ] 第一節・第二節の末、アゲハ後に謡が中音（フリ中回シ）に下行する句、[クセ] 末でのアシライ

74	高砂	ミナ和歌ノすかたなら すや	第一節末	中ノタカネ一ツ	ナシ
		はんミンこれをしや うくわんす	第二節末（アゲハ 前）	タ、リウロ	
		立よる <u>かけ</u> の朝タに	アゲハあと謡がフリ 中回シ、大小鼓が頭 組を打つ	タカネノひしき一 ツ。又はねて一ツ。	
		たとへなりけり。と きハ木の中にも名ハ たかさこの	[クセ] 末	中ノタカネ一ツツタ ヘシ。たかね一ツ。 又はねて一ツ	
75	田村前	地主権現の <u>花の色</u> も	アゲハ前	ソトイロ有	ナシ
		しめちかはらのさし も草。 <u>我世</u> の	アゲハあと、クリ音	ヲルタカネキリテ一 ツ	上ノ高音ヒシグ
		ミとりもさすや <u>青柳</u> の	アゲハ後、謡がフリ 中回シ、	下無ヨリタカネヘ吹 上六ノ下ヘマハシテ 一返	ナシ
		春もおしなへて。 <u>の</u> <u>とけき</u> かけハ有明 の。天もはなにゑゝ り	[クセ] 末	タカネ一ツコテ一 返。ロンキマテゆふ ／＼ト吹かけヘシ。 又タリ不申候ハ、六 ノ下吹ヘシ。	小手
76	田村後	駒もあしなミやいさ <u>むらん</u>	第二節末（アゲハ 前）	爰ニて大夫ノしまい 有間不可吹。口伝。	ナシ
		さきかけんとかつ色 <u>ミせ</u>	アゲハあと、クリ音	たかねノひしき一ツ	上ノ高音
		すゝかのみそきせし <u>よゝ</u> までも	[クセ] 末	六ノ下一返イカニも ツヨクテイロ不可吹 也	小手

77	松風	わするゝ隙も有 <u>なん</u> と	アゲハの3句前	下ノタカネーツ。コテーツ	ナシ
		かけてそたのもうなし <u>世</u> に	アゲハあと、クリ音	ヲルタカネーツ	上ノ高音
		おもかけに立まさり。を <u>きふ</u> し	2度目にクリ音に上行	タカネノフキムスひーツ。中ノタカネーツ。又ツキテ	ナシ
		ふししツむ事そかなし <u>き</u>	[クセ] 末	能乱舞とも二不可吹候。但乱舞ニテハツ、ミーツニツ程こいやいにて呂のこて少吹へし。能にてハものき也	小手
78	盛久	の給ひて夢ハ <u>即</u> さめにけり	[クセ] 末直前	タカネーツコテヘヲトシテ返	ナシ
		心かきりなし	[クセ] 末	コテノイロヘ	小手
79	源氏供養	相へつりくのことハ <u>りまぬ</u>	アゲハあと、クリ音	をるたかねきりテーツ	上ノ高音
		朝かほの光たのまれ <u>す</u>	2度目のアゲハの前	そといろへ	ナシ
		つかさくらゐを <u>あ</u>	2度目のアゲハあと、クリ音	高音ノ吹むすひきりてつきて	上高音ヒシグ
		ゑこうもすてにをわ <u>りぬ</u>	[クセ] 末	コテノいろへ	小手
80	羽衣	月もくらぬ日の元 <u>や</u>	第二節末（アゲハ前）	そといろへ	ナシ
		なつともつきぬいわを <u>そと</u>	アゲハあと、クリ音	高音ノ吹むすひーツ	上ノ高音
		白雲の袖 <u>そたへ</u> なる	[クセ] 末	コテノイロヘそと	小手
81	当麻	一人の老尼の <u>こつせ</u> んと <u>来り</u>	第一節末	下ノ高音ーツコテヘヲトシテ	ナシ
		ちうしやうひめあき <u>れつ</u> と	第二節末（アゲハ前）	そといろへ	ナシ
		たつきもしらぬ山中に	アゲハ直後	たかねーツ又高音ノ吹むすひーツ	上ノ高音
		こたへさせ給ひしに	アゲハあと謡がフリ中回シ、大小鼓が頭組を打つ	ヲルたかねきりてーツ高音ーツコテーツ	ナシ
		正身のミタ如 <u>来</u> けに	アゲハあと謡が再びフリ中回シ	高音ーツコテヘヲトシテ	ナシ

59 『古頭付』から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

82	殺生石	ひとへに月のことなり	第二節末（アゲハ前）	そといろへ	ナシ
		あへのやすなりうらなつて	アゲハあと、クリ音	たかねノひしき一ツ	上ノ高音
		かたむけんと化生して	アゲハのかなりあと、謡はクリ音でもフリ中回シでもない	高音一ツをるたかね一ツ	ナシ
		きへし跡ハこれなり	〔クセ〕末	そといろへ	小手
83	夕顔	はかなかりけるひおむしの	第一節末	コテノいろへ	ナシ
		風にまたたくともし火の	アゲハあと、クリ音	ヲルたかね。きりて一ツ	上ノ高音
		夢にきたりて申とてあり	〔クセ〕末	下ノたかね。コテハヲトシテ一ツ	小手

ロンギ・ノリ地

84	高砂	けに名をゑたる松かへの	〔ロンギ〕初句あとの打切	タカネノひしき一ツ	高音
		かしこきよとて。〔つちも木も	〔ロンギ〕地渡シ	はねて一ツ	ナシ
		あまの小舟にうちのりて	〔ロンギ〕末	たかねノひしき一ツ。又ハネテ一ツ	ナシ
		沖ノ方に出にけりや／＼	〔ロンギ〕末	大ゆり 大夫かくやへ入間吹ヘシ	送り 大ユリ
	高砂	さてはんせいハおミ衣	後の〔ロンギ〕地渡シ	タカネノひしき一ツ	ナシ
		千秋楽ハ民をなて	〔ロンギ〕末	タカネノひしき。又ハネテ。はねて一ツ。又吹返す	
		さツ／＼のこゑそたのしむ／＼		笛吹上也。ツ、ミの打上ノ拍子をうけてのひ／＼トひツと／フクヘキ也	真ノトメ
85	田村	さかのうへの田村 <u>たう</u> の軒もるや	〔ロンギ〕末 中入前	タカネ一ツコテヘヲトシテ一ツ。	ナシ
		内にいらせた <u>ま</u> へけり	〔ロンギ〕末 中入前	六ノ下一返	小手
86	松風	しをちかなや	〔ロンギ〕末	呂ノコテ一返。イカニモウツクシクフクヘシ	小手不吹モ

87	盛久	はやかまくらに付に けり△	[ロンギ] 末	六ノ下一返	六ノ下ないし小 手
		御しんかんハかきり なし	[ロンギ] 最初の地 謡末	ソトコテ	ナシ
88	当麻	尼上のたけとハ申な り老の坂を	ロンギ末 中入前	下ノたかね一返中入 まで吹也さしきには 不吹候	小手
89	羽衣	あつまあそひのかす ／＼に	ノリ地冒頭返シの打 切	高音ノひしき	高音

セリフ・カケ合途中などでのアシライ

90	高砂	こゝろヲともトすか むしろの、おもひ	登場の [下ゲ歌] 直 前 [サシ] 末	本ノ呂。又のちイロ エテ	真ノ呂
91		しる事あらハ申さ給 へ	[問答] シテのセリ フ最後	コテノイロヘ	ナシ
92		相生のふう／＼と成 物お	[掛ケ合] 直前 シ テ謡末	「フウ／＼」コテノ フキヤウアリ	
93		夜ノツ、ミの <u>拍子</u> を そろへ	後シテ登場 [サシ] 末	呂ノのタレ	ノタレ
94		しやうこんによつて こしを <u>すれ</u> ハ	後シテ登場 [一セイ 崩シ]	タカネノハネテーツ	ナシ
95		千年の <u>みとり</u>	後シテ登場 [一セイ 崩シ]	たかねーツ	
96	田村	ありしハ是 <u>坂ノ上</u> の	[上ゲ歌] (初同) 直 前サシ謡末	ソトイロヘ	ナシ
97		観音おうこの <u>結縁</u> な る	後シテ登場 [サシ] 末	中ノタカネイカニも ツヨク吹也	
98	松風	人にたつねはやとお もひ <u>候</u>	ワキのコトバ末	コテーツ	ナシ
99		おもひおほさぬ心か な	登場の [下ゲ歌] 直 前 [サシ] 末	呂ノコテ	
100		秋なりけり。あら心 すこの夜す	掛ケ合前・サシ末	呂ノカスリ	
101		あるしに其由申候 <u>ハ</u> <u>ん</u>	会話の区切り	立マハル度ニ口伝 有。コテノイロヘ	
102		叶ふましき由申候へ	会話の区切り	そトイロヘル也	
103		おとまりあれと申候 <u>へ</u>	会話の区切り	呂ノコテ	
104		又いつの世のおとつ れ <u>を</u>	[下ゲ歌] 直前	ソトイロヘ	ナシ
105		またハこんどのこと のはの。 <u>こ</u> なたハ忘 れず	カケ合途中	呂ノコテーツ。爰ニ テ心有ヘシ	呂ノ吹上

61 『古頭付』から読み解く江戸初期以前の一噌流アシライ

106	盛久	いつ帰るへき旅ならん	[下ゲ歌] 前 サシ 末	呂ノコテ	ナシ
107		其由を申候へ。畏て候	クリ前	しか／＼アシライ無 之候	
108	源氏供養	是迄あらはれ出たるなり	前 [掛ケ合] 途中 シテ謡末	コテノイロヘ	ナシ
109		なのらすとしろしめ されよや	後場の [掛ケ合] シテ謡末	コテノいろへ	
110	羽衣	行来しらすも	[下ゲ歌] 直前 下 ノ詠末	そといろへ	ナシ
111	当麻	何にはる / 〳とおも ふ乱	前シテ登場の [下ゲ 歌] 直前 [サシ] 末	かつらノ呂一返	ナシ
112		一心ふ乱に南無あみたふつ	[問答] 途中のシテ 謡末	呂ノかすり	
113		ひさくらの	[上ゲ歌] (初同) 直 前サシ謡末	そといろへ	
114		ほつしんきやく来の ほうミを	後シテ登場のサシ末	呂ノのたれ	
115		せつしゆふ捨	後場 [ノリ地] 途中	大ゆり吹様有之	ナシ
116	殺生石	もとめたまへる命かな	前 [掛ケ合] 途中 シテ謡末	コテノいろへ在	ナシ
117		木石心なし	小鼓ノット ワキ謡	大ゆり	ノット (大ユ リ)
118		あらわれ出たるおそ ろしや	後シテ登場	大ゆり少吹也	
119	夕顔	花むらさきの野お分 て	道行直前のサシ謡末	そといろへ	ナシ
120		しはらくやすらい尋 はやとおもひ候	着キゼリフ末	下ノたかね一返。口 伝	
121		かけやたゑなん	シテ登場歌 [下ノ 詠] 末	コテノいろへ	
122		かはらのいんと御覧 せよ	[問答] 途中のシテ 謡末	コテノいろへ	
123		あと能とむらひ給へ とよ	後場の [掛ケ合] シテ謡末	中ノたかね一ツ	
124		さも物すこき思ひた まハシ	後場のカケ合でワキ 謡の末	そといろへ	
125		しるへにて	[序ノ舞] 前一セイ 謡の区切り	たかね一ツ	
126	経政	在かたさよ	[上ゲ歌] (初同) 直 前サシ謡末	そといろへ	ナシ